

## 「ユメ (夢)」の語誌

今野 真二

### 要旨

日本語の「ユメ」の語義は「1：睡眠中に、いろいろな物事を現実のこのように見たり聞いたり感じたりする（視覚的性質をもった）現象」「2：覚醒中に視覚的な性質を帯びて現われる空想や想像」「3：（1の比喩的用法として）ぼんやりとして不確かなさま、はかないさま、頼みとならないさま」「4：心の迷い、迷夢」「5：将来の希望」「6：現実のきびしさから隔絶した甘い環境や雰囲気」のように6つ程度に分けて記述されることが多い。本稿では、「ユメ」の語義を「A：睡眠時のユメ」「B：覚醒時のユメ」「C：将来の希望としてのユメ」の3つに整理しなおし、それぞれについて考察を加えた。その結果、これまで新しい語義とされてきたCはAの比喩的用法とみなすことができるのではないかという仮説を提示した。また「ユメ」の対義語である「ウツツ」に着目し、「ウツツ」が〈夢〉をあらわすようになることをふまえ、日本語においては、AとBとの区別も然然としていないことを述べた。

### The history of *Yume*

Shinji KONNO

### Abstract

The Japanese word “yume” translated as “dream” is often defined in six parts as the following “1. A phenomenon (with a visual characteristic) that is seen, heard or felt during one’s sleep as if it had happened in real life. 2. A fantasy or imagination that appears with a visual characteristic while one is awake. 3. (As figurative usage of definition 1) Situation of uncertainty, unrewarded efforts and unanswered request. 4. Indecisive mind, illogical thought as in a dream. 5. Hope of the future. 6. Sweet and comfortable environment or atmosphere that isolates one from the difficulties of real life.” This paper has organized the definition into the following three categories: “dream” as defined in “A: dream seen during sleep, B: dream seen when one is awake and C: dream held as hope of the future” and did a study on each of these parts. As a conclusion, the paper presents a hypothesis that “dream” defined in C, which was thought to be new, can be seen as a figurative usage of “dream” defined in A. Furthermore, the paper focuses on “reality” as the antonym of “dream,” and discussed that in the case of the Japanese language, the distinction between definition A and definition B is not clear (based on the understanding that “reality” may describe the definition of “dream”).

## はじめに

『万葉集』巻5の809番歌には「直に逢はずあらくも多くしきたへの枕去らずて夢(伊米)にし見えむ」とある。また『万葉集』巻15の3714番歌には「秋されば恋しみ妹を夢(伊米)にだに久しく見むを明けにけるかも」とある。これらの「伊米」はいうまでもなく「イメ」である。『時代別国語大辞典上代編』(1967年、三省堂刊)は見出し項目「イメ」において、「上代では必ずイメという形で現われ、ユメという形はなかった。語源について、忌ムと関係づける説もあるが、やはり寐=目と考えるべきであろう」と述べている。『日本国語大辞典』第2版(2000年～2002年、小学館刊)の見出し項目「ゆめ」においては、「「いめ」の変化した語」と記されている。語源をどうみるかということは、ひとまず措くとして、「イメ」の変化形が「ユメ」であることは認め、ここでは「イメ」「ユメ」をまとめて「ユメ」に包含して考察を進めていくことにする。

まず現在刊行されている辞書が「ユメ」の語義をどのように記述しているかを整理しておくことにする。『日本国語大辞典』第2版は見だし項目「ゆめ」の語義を6つに分けて記述している。

- 1: 睡眠中に、いろいろな物事を現実のここのように見たり聞いたり感じたりする現象。多くは視覚的の性質をもち、覚醒時の刺激の残存や身体内部の感覚的の刺激に影響されて起こるもの。(以下略)
- 2: 覚醒中に視覚的な性質を帯びて現われる空想や想像で、それに引き入れられて放心状態になるようなものをいう。また、非現実的な空想。白昼夢。
- 3: (1を比喩的に用いて)ぼんやりとして不確かなさま、はかないさま、頼みとならないさまなどをいう。
- 4: 心のまよい。迷夢。
- 5: 将来、実現させたいと思っている事柄。将来の希望。思いえがく将来の設計。また、現実ばなれした願望。
- 6: 現実のきびしさから隔絶した甘い環境や雰囲気。

『新潮国語辞典』第2版(1995年、新潮社刊)には次のようにある。

- a: 睡眠中、体の内外に起る刺激や脳に保存された経験・記憶が、自発的活動を起すことにより引き起される精神現象。多くは視覚的の性質を帯びる。
- b: ぼんやりしたさま、また、はかない様子にたとえる語。
- c: わずかなさまにたとえる語。
- d: この世の迷い。煩惱。

e: 将来そうあってほしいという願い。将来の希望。

f: 現実ばなれした事柄。また、それに浸ること。

『日本国語大辞典』第 2 版の 1、3、4、5、6 がそれぞれ『新潮国語辞典』第 2 版の a、b、d、e、f に対応していると思われる。『日本国語大辞典』第 2 版の 2 が『新潮国語辞典』第 2 版にみられず、『新潮国語辞典』第 2 版の c が『日本国語大辞典』第 2 版にみられない。c は b に包含することができると思う。『日本国語大辞典』第 2 版の 2 は「睡眠中」ではなく「覚醒中」のことであり、語釈中に「白昼夢」という置き換えがみられる。「白昼夢」は英語の「daydream」にあたるか。「白昼夢」(の内容)は「非現実的な空想」である場合もあろうが、そうでないこともあると思われ、そうであれば両者の概念は全同ではない。「非現実的な空想」は 5 の「現実ばなれした願望」と重なりがあり、『日本国語大辞典』第 2 版の語義記述は整っていないと思われる。

『日本国語大辞典』第 2 版は 3 について「1 を比喩的に用いて」と述べているが、妥当なみかたと思われるので、1 と 3 とをまとめることにする。つまり 1 を比喩的に使うことがあると認める。6 は 5 の「現実ばなれした願望」を否定的にとらえた場合とみることができるので、5 と 6 とについても、まとめて考えることにする。そのように考えると、「ユメ」の語義は  $(1 \cdot 3) + 2 + 4 + (5 \cdot 6)$  と分けてとらえることができ、ひとまず 4 つに別れることになる。『日本国語大辞典』第 2 版の記事を使いながら、「ユメ」の語義を 4 つに分けて整理しておく。以下の行論においては、この、語義を整理した 1～4 の番号を使うことにする。

- 1: 睡眠中に、いろいろな物事を現実のこのように見たり聞いたり感じたりする現象。多くは視覚的性質をもつ。ぼんやりとして不確かなさま、はかないさま、頼みとならないさまなどを比喩的にいうことがある。(1・3)
- 2: 覚醒中に視覚的な性質を帯びて現われる空想や想像で、それに引き入れられて放心状態になるようなものをいう。白昼夢。(2)
- 3: 心のまよい。迷夢。(4)
- 4: 将来、実現させたいと思っている事柄。将来の希望。思いえがく将来の設計。また、現実ばなれした願望。現実のきびしさから隔絶した甘い環境や雰囲気。(5・6)

本稿は「ユメ」の語誌を描くことを目的とする。その際、(当然のことともいえるが)「ユメ」が言語によってどのように描写されているか、「ユメ」がどのように語られているかということに留意していきたい。語義は上記 1～4 に整理できると考えるが、2～4 について 3、2、4 の順番で、重点的に検討を加えることにする。

## 1：迷夢としての「ユメ」

『日本国語大辞典』第2版の4は『源氏物語』若紫の例をあげている。

僧都おはしぬれば、「よし、かう聞こえそめ侍りぬれば、いと頼もしうなむ」とて、  
をしたて給つ。あかつき方になりければ、法花三昧をこなふ堂の懺法の声、山おろ  
しにつきて聞こえるいとたうとく、滝のをとに響きあひたり。

吹まよふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝のをとかな  
さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心はさはぎやはする  
耳馴れはべりにけりや」と聞こえ給。(引用は新日本古典文学大系)

この場面では、法華経を読誦することによって、罪を懺悔する法華懺法を行なっており、その声が深山おろしとともに聞こえてきて、「ユメ」がさめる。この「ユメ」は1であると同時に「迷いのユメ」すなわち仏法でいうところの「メイム（迷夢）」すなわち〈夢の中を行くような迷いの境地〉（『日本国語大辞典』第2版「めいむ」の項目）でもある。ちなみにいえば『大漢和辞典』は「メイム（迷夢）」に出典を示していない。仏教的な文脈で使われる「ユメ」に4の語義を認めることはできるが、結局は先に引いたように、〈夢の中を行くような迷いの境地〉が「メイム（迷夢）」なのであって、1の比喩的用法とみることができると思われる。つまり1の比喩的用法で、仏教的な文脈で使われる「ユメ」が「迷夢としてのユメ」をあらわしていることになる。比喩的用法であるので、本来的な1との区別がつきにくい場合もあることが予想される。3を1の比喩的用法と認めると、「ユメ」の語義は次のようにさらに整理することができる。Aの比喩的用法には、抽象的用法（『日本国語大辞典』第2版の語義3）と仏教的な文脈で使われる比喩的用法（『日本国語大辞典』第2版の語義4）とがあることになる。

A：睡眠時のユメとその比喩的用法

B：覚醒時のユメとその比喩的用法

C：将来の希望としてのユメ

## 2：覚醒時の「ユメ」

『日本国語大辞典』第2版は語義Bの使用例を示していない。したがって、どのような文脈で使われた「ユメ」をBとみているかは不分明である。西郷信綱『古代人と夢』（1972年、平凡社刊）もあげているが、『万葉集』巻2に「青旗の木幡の上を通ふとは目には見れどもただに逢はぬかも」（148番歌）がある。この歌には「一書に曰く、近江天皇の聖

体不予にして、御病急なりし時に、大後の献め奉りし御歌一首」という詞書きが附されており、近江天皇が危篤に陥った時に皇后が奉った歌であることがわかる。木幡の山の上を御霊がいききしているのが、目に見えているけれども、じかには逢うことができない、といった時の「目には見れども」を比喩表現としてではなく、そのまま受けとめれば、これは〈ないものがあるかのように見えること〉、すなわち「幻視／幻影」ということになる。ただしここには「イメ（ユメ）」という語は使われていない。

文学作品あるいは文学的な修辞を使っている文章を素材とした場合、比喩的な表現であるかどうかを判断することはむずかしい。今ここで話題にしているようなことがらについて、現代人の（いうところの）「合理性」に基づいて、御霊が実際に見えるわけがない、と判断するならば、こうしたことがらについての考究そのものができる、もしくは意義をもたないことになる。

『更級日記』の承承元（1046）年と目されている年の記事に、「その夜、山辺といふ所の寺にやどりて、いとくるしけれど、経すこしよみたてまつりて、うちやすみたる夢に、いみじくやむごとなく、きよらなる女のおはするに、まいりたれば、風いみじうふく。見つけて、うちゑみて、「なにしにおはしつるぞ」と問ひたまへば、「いかでかはまいらざらむ」と申せば、「そこは内にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふ、と思て、うれしくたのもしくて、いよいよ念じたてまつりて、初瀬河などうちすぎて、その夜、御寺にまうでつきぬ。祓へなどしてのぼる」（新日本古典文学大系421頁）とある。

ここでは「経すこしよみたてまつりて、うちやすみたる夢に」とあって、経を読んだあとで、まどろんだ時に夢をみていることがわかる。睡眠に入っていく自分がどこから睡眠に入っていくかは自身では認識できない。そうした意味合いにおいて、覚醒時と睡眠時との境界はそもそも不明瞭である。それでも、ここでは「夢に」と表現されていて、言語表現上は、覚醒時と夢とが区別されている。

「博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまう、と思て」の後には、夢からさめたということが表現されてよいはずであるが、それは表現されずに、「うれしくたのもしくて、いよいよ念じたてまつりて」という現実世界の描写に続いていく。こうした描写のしかたは、言語表現として、睡眠時＝ユメと覚醒時＝ウツツとが截然と区別されていない描写方法とみえる。言語表現は限定的にとらえれば、「表現のしかた」にとどまるが、それが「認識のしかた」をも示していることがあると考える。

『更級日記』では、上に引いた記事に続いて、「三日さぶらひて、あか月まかでむとて、うちねぶりたる夜さり、御堂の方より、「すは、稲荷よりたまはるしるしの杉よとて、物をなげいづるやうにするに、うちおどろきたれば、夢なりけり」（同前421頁）とあって、この記事では、「ユメ」に入っていく描写がなく、さめた時の描写がなされている。

あるいは『平家物語』巻三「有王」において、「誠に汝が是まで尋来たる心ざしの程こそ神妙なれ。明ても暮ても、都の事のみ思ひ居たれば、恋しき者共が面かげは、夢にみる

おりもあり、まぼろしにたつ時もあり。身もいたくつかれよはて後は、夢もうつゝもおもひわかず。されば汝が来たれるも、たゞ夢とのみこそおぼゆれ。もし此事の夢ならば、さめての後はいかゞせん」（古典文学大系 235 頁）とある。ここでは身体が疲れ弱っている時は「夢もうつゝも」わからないという。そしてこの記事には「ユメ」「ウツツ」「マボロシ」三語が使われている。あるいは「夢まぼろしにもしらざりけるぞ」（238 頁）という表現もみられる。この表現においては、「ユメ」と「マボロシ」とが同義語として使われていると覚しい。

また、これも西郷信綱（1972）があげる例であるが、『古事記』中巻において、倭建命の薨去に際しての記事には次のようにある。

是に倭に坐す后等又御子等、<sup>もろもろ</sup>諸下り到りて、御陵を作り、即ち其地のなづき田に<sup>は</sup>匍<sup>も</sup>ひ廻りて、哭為して歌曰ひたまひしく、  
なづきの田の<sup>いながら</sup>稲幹に<sup>は</sup>匍<sup>も</sup>ひ廻ろふ野老蔓<sup>ところづら</sup>  
とうたひたまひき。是に八尋白智鳥に化りて、天に翔りて濱に向きて飛び行でましき。

ここでも「后等又御子等」が「八尋白智鳥」になって天翔りゆく倭建命の魂を見たことが記されている。やはり「イメ（ユメ）」という語は使われていないが、「幻視／幻影」とみることができる。これらの例からわかることは、「幻視／幻影」と思われる現象はあった。しかしそれを「イメ（ユメ）」という語で表現していないということである。「幻視／幻影」を表現するための特別な語がないということは、「幻視／幻影」は日本文化の中にはない、とみることでもできる。例えば、「イメ（ユメ）」Aを「dream」、「イメ（ユメ）」Bを「vision」と別語で理解している文化があったとして、その文化においては、それぞれが別の概念であることになるが、一つの語が「dream」と「vision」とを兼ねている文化においては、概念が別れていないのだから、どちらかの概念がないとみることでもできることになる。

AとBとの違いは、睡眠中にみるか、覚醒時にみるか、という点にある。「ユメ」を見るのは睡眠中である、と断定してしまうのでなければ、睡眠中にみたのか、覚醒時にみたのかは、夢を見た主体のその時の判断、感覚によることになり、（実際にどうだったかという議論は意義をもたないと考えるが）その「判断、感覚」をさらに言語でどのように表現するかということも含めると重層的で、截然としない場合があることは原理的にも容易に想像できる。

『源氏物語』明石巻では、「うちまどろ」む源氏の夢に故桐壺帝が現われる。目覚めた場面は「飽かずかなしくて、「御供にまいりなん」と泣き入り給て、見上げ給へれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心ちもせず、御けはひとまれるこちして、空の雲哀にたなびけり」（引用は新日本古典文学大系『源氏物語2』57頁、一部表記を変更した）と描写されている。「夢の心ちもせず、御けはひとまれるこちして」は、夢である

ことを認めた上での表現であるが、表現しているのは「夢のようではなかった」ということであり、「判断」も言語表現も、睡眠時か覚醒時かということに関して、截然とはしない。これは当然のことといえよう。引用した箇所、新日本古典文学大系の脚注は、源氏の夢に現われた故桐壺帝のこぼを「故桐壺院の霊の言」と表現する。桐壺院は亡くなっているのだから、夢に現われているのは桐壺院その人ではなく「桐壺院の霊」ということだろう。このようなみかたは、現代人の考える「合理性」（という表現を使うことにするが）に基づくものではないか。源氏は（とっておくが）夢で桐壺院ではなく、「桐壺院の霊」に会ったと思ったのだろうか。

「ユメ」の対概念は「ウツツ」であるが、それを並べた「ユメウツツ」という複合語がある。「ユメウツツ」は「かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ定めよ」（『伊勢物語』第69段）のように〈夢と現〉であると同時に、〈夢か現かがわからないさま〉をも現わすことがある。ちなみにいえば、『伊勢物語』第69段では、引いた和歌の前には「君や来し我や行きけむおもほえず夢か現か寝てかさめてか」という和歌が置かれている。

(1・3・4) と 2 とを分けるのが、(なんらかの概念差ではなくて) 上記のように「睡眠時／覚醒時」ということのみであるのだとすれば、結局は 2 を (1・3・4) の変異形として、包含することもできる。そのようにみるとすれば、最終的には、「イメ (ユメ)」の語義は (1・2・3・4) と (5・6) との二つを考えればよいことになる。

### 3：「ユメ」と「ウツツ」

『日本国語大辞典』第2版は見だし項目「うつつ (現・顕)」において、語義の最初に①「世に実際に存在していること。また、その存在しているもの。多く、観念世界、死、虚構のものなどに対して用いられる」と説明し、その④に「(観念世界に対して) 目ざめた意識に知覚される現実。実際」と記す。その一方で、③「(「夢うつつ」と続けていうところから誤用して) 夢か現実かははっきりしないような状態。また、そのような状態にあるもの」と説明し、その④に「夢を見ているような心理状態。夢見ごち。夢。まぼろし」と記す。そして語誌欄では「「夢うつつ」と続けるところから、中世に本来は対義であった「夢心地」「夢まぼろし」の意が生じ、以降両用される」とある。現代方言でも、「ウツツ」を「はっきりしないこと。不分明」の意で使う地域があることもわかる。

そもそもは(相当に)対立的な概念を表わす語である「ユメ」と「ウツツ」とが接近していくという場合、そうした接近を可能にした条件があるはずで、そうした条件について、また接近のモデルについても考えておきたい。

「ウツツ」と「ユメ」とが接近する場合、「ウツツ」が「ユメ」に接近していくのか、「ユメ」が「ウツツ」に接近していくのかということがある。言い換えれば、これまで「ウツツ」と表現していたことがらを「ユメ」と表現するようになった、ということなのか、「ユ

メ」と表現していたことから（＝観念世界）を「ウツツ」（＝現実世界）と表現するようになった、ということなのかである。つまり、「ユメ」＝観念世界のできごとを「ウツツ」と表現するようになった結果、「ユメ」と「ウツツ」とが接近したのか、「ウツツ」＝現実世界のできごとを「ユメ」と表現するようになった結果、両者が接近したのかということである。

[ユメかウツツか―別概念としてのユメとウツツ]

『御伽草子』「木幡狐」の例を挙げる。

さるほどに中将殿は、此姫君を御覧じて、夢か現かおぼつかなしと御覧じけるに、そのかたち云はかりなく、まことに玄宗皇帝の、楊貴妃、漢の武帝の世なりせば、李夫人かとも思ふべし（日本古典文学大系 151 頁）

ここでは、「中将殿」が「姫君」を実際に見ているのだから、「中将殿」にはそれが現実世界＝「ウツツ」のものであることがわかっていたはずである。その現実世界の「姫君」について「夢か現かおぼつかなし」と表現するのは、修辭的な表現であることは確かであるが、いわば「ウツツ」を「ユメ」かと思うという表現図式であることになる。これを「ウツツのユメへの接近」ととらえることにする。

『御伽草子』は話柄ゆえ（とっておくが）、「ユメかウツツか」という表現が多くみられる。『鉢かづき』の末尾ちかくにおいて、宰相殿とともに長谷に詣でた鉢かづき姫は、修行者となって長谷に参籠する父の実高と再会する。その時父は「これは夢か現か、ひとへに観音の御利生なり」という。あるいは、『猿源氏草子』において、天女を殺された左衛門は、天女の死骸に抱きついて、「さてもこれは天女かや、いかなる者のしわざなりとも、現にも知るならば、かく憂き目にはあはせじ物を、夢かや現か」と、流涕こがれ悲しみけり」（日本古典文学大系『御伽草子』172 頁）と悲しむ。「ユメかウツツか」という表現そのものは当該時期においては定型的な紋切り型の表現になっていたとも思われるが、そうであっても、「A なのか B なのか」というこの表現形式においては、「ユメ」と「ウツツ」とがいわば対比的にとらえられていることはたしかといえよう。A と B とは異なる概念のはずである。

[ユメウツツ・ユメマボロシ―概念の接近]

「中納言は、夢現ともおぼえず、車に乗り給ふ」（『梵天國』284 頁）、「あまりにあやしく思ひ、取る物も取あへず、走り行きて見候へば、少しも違はせ給はずかの女房にて候間、夢現ともおぼえず」（『三人法師』439 頁）では、「夢現（ユメウツツ）」という表現が使われている。いずれも、「ユメともウツツともおぼえず」ということであると思われ、その

ように使われているのであれば、「ユメ」と「ウツツ」とは対概念であることを保っていることになる。しかし「ユメウツツ」が一つの語あるいはそれに準じたひとまとまりの語句とみなされ、「ユメ」が先にあることから、「ユメウツツ」全体が「ユメ」と同義（あるいは類義）とみなされるようになることは考えられる。

また「ユメマボロシ」という表現もある。「姫君、うき世に長らへば、いかならん殿上人か、関白殿下などの北の方ともいはれなん、なみなみならん住居は、思ひもよらず、それさなき物ならば、電光朝露夢幻の世の中に、心をとめて何かせん」（『木幡狐』148頁）でははかないものとして「夢幻（ユメマボロシ）」という表現がとられている。「ユメマボロシ」はそもそも同義（あるいは類義）の語が並べられた表現で、「ユメウツツ」の語義が「ユメマボロシ」の表現形式によって類推された可能性はひくくはない。

[ユメかウツツかマボロシかー類概念としてのユメとウツツ]

『御伽草子』にはさらに次のような表現もみられる。

「はづかしや、こはそも夢か、現か、幻か。いかなる人にてましませば、いやしき柴の戸に竹の柱の臥し所をば、とはせ給ふは、こなたのことか、よそのためか、何事ぞや」（『小町草子』90頁）、「萬壽は信濃にこそ置きつるが、今年は十二になるとおぼえたり、夢か現か幻か、夢ならば、とくさめよ、さめての後はうらめしや」（『唐糸さうし』138頁）

これらの表現においては、「ユメ・ウツツ・マボロシ」がこの順に並べられている。「AかBかCか」という表現において、AとCとがちかい概念で、BがACとは異なる概念ということは考え難く、このように並べられていれば、ABCがちかい概念であると理解されるのは自然なことであろう。つまり、このような表現がひろく使われるようになった時点で、「ユメ」と「ウツツ」とは接近した、というよりは、「ウツツ」が「ユメ」に包含されたといってよいと考える。「ユメ・ウツツ・マボロシ」は「(ユメ・ウツツ)・マボロシ」という成り立ちをしていると思われ、ほぼ同義と認識されるにいたった「ユメ」「ウツツ」の組に、さらに「マボロシ」を添えて成った表現と考える。「ユメ」と「マボロシ」とが類義語であれば、当然「ユメ・ウツツ・マボロシ」三語も同義語と認識されていたはずである。

『日本国語大辞典』第2版は見出し項目「うつつ」の語義③のイの例として『西鶴諸国はなし』（1685年）の「是をかなしく、独ねられぬままに、世の無常をくはんずる時、寐させ置たる、二人の子共、<sup>うつつ</sup>現に声をあげて、びくびく身のうごく事、三十七度也」を引く。「寐させ置たる、二人の子共」は寝入っているはずで、新日本古典文学大系の脚注は、この「<sup>うつつ</sup>現に」に「夢現（ゆめうつつ）の時に急に、の意」と記す。ここでは、「ユメ」Aが「ウツツ」と表現されていることになり、ここにいたって、「ウツツ」は「ユメ」になったといつてよい。

ところで、南北朝時代に成立したと目されている『秋夜長物語』では、比叡山の衆徒で

ある桂梅律師が石山寺に詣でて即証菩提を祈願し、その夜、仏前で容姿端麗な稚児を夢に見る。桂梅律師は以来、その稚児の面影が忘れられなくなり、再び石山寺に参ろうと思って、三井寺の前を過ぎると、夢で見た稚児と少しも違わない稚児に出会う。この稚児は花園左大臣の子息梅若であった。実際に現実世界に存在する人物が夢に出てくるといふ話柄は多い。この話柄も、結果側からみれば、同じことになるが、それが夢での出会いから語られているところに新しさがあるのではないだろうか。夢で見た稚児＝人物に現実世界で会った時に、桂海は「是や夢ありしや現わきかねていづれにまよふ心なるらん」という和歌をつくる。日本古典文学大系はこの和歌に対する頭注で「これが夢ではないのか、前に見た夢は現実の事ではないのかしら、何れが夢とも現とも分別しかねて、ありし夢と今の現とどちらに迷う自分の心なのであろう」と記す。今現実世界で出会った稚児が「ユメ」であるはずはない。したがって、これも修辞であるとまずは考えられるが、それでも、夢への通り路を通して、現実世界の人が夢に現われるのではなく、その通り路をいわば逆にたどって、非現実世界の人が現実世界に現われるということが話柄になるのだから、両者はきわめて接近してきていることが窺われる。

『古今和歌集』巻12恋歌2に収められている藤原敏行朝臣の「恋ひわびてうち寝るなかに行かよふ夢の直路はうつつならなむ」(558番歌)においては、「夢の直路」が「ウツツ」のものではないことがはっきりと意識されている。あるいは巻10物名に収められている清原深養父の「うばたまの夢に何かはなぐさまむ現にだにも飽かぬ心を」(449番歌)においては、「ユメ」と「ウツツ」とが対概念として明白に意識されている。こうした時期から南北朝時代になる間に、次第に変化が進行したと覚しい。

#### 4：将来の希望としての「ユメ」

太宰治『人間失格』に次のような行りがある。

堀木はそれを半分はお世辞で言ったのでしようが、しかし、自分にも、重苦しく思い当る事があり、たとえば、喫茶店の女から稚拙な手紙をもらった覚えもあるし、桜木町の家の隣りの将軍のはたちくらの娘が、毎朝、自分の登校の時刻には、用も無さそうなのに、ご自分の家の門を薄化粧して出たりはいたりしていたし、牛肉を食いに行くと、自分が黙っていても、その女中が、……また、いつも買いつけの煙草屋の娘から手渡された煙草の箱の中に、……また、歌舞伎を見に行つて隣りの席のひとに、……また、深夜の市電で自分が酔つて眠つていて、……また、思いがけなく故郷の親戚の娘から、思いつめたような手紙が来て、……また、誰かわからぬ娘が、自分の留守中にお手製らしい人形を、……自分が極度に消極的なので、いずれも、それっきりの話で、ただ断片、それ以上の進展は一つもありませんでしたが、何か女に夢を

見させる雰囲気、自分のどこかにつきまとっている事は、それは、のろけだの何だのといういい加減な冗談でなく、否定できないのであります

ここでの「ユメ(夢)」の語義は(将来の希望)といてよいであろう。その〈希望〉がはっきりと具体的、現実的なものとしてとらえられているか、そうではなくて、漠然とした実現性のさほどたかくないものとしてとらえられているかは、二次的なことと考えるのでそれらを区別しない。『日本国語大辞典』第2版は、この『人間失格』(1948年)の「ユメ」を見出し項目「ゆめを見る」の③「空想を描いて夢中になる」の例として掲げている。つまり「ユメ」の(5・6)の例とみなしている。「ユメ」5には1900年以降の使用例しか挙げられておらず、「ユメ」6にはそもそも使用例が挙げられていない。このことからすると、「ユメ」(5・6)は後発した語義とみえるが、いつ頃から「ユメ」はこうした語義を獲得したとみなせばよいのだろうか。

幾つかの国語辞典の記事を整理して掲げる。

【『言海』1891年完結】

- (1) 古言、イメ。睡レル中ノ物思ヒニ、現<sup>ウツツ</sup>ノ如ク物ヲ見ルコト。
- (2) 夢ノ如クハカナキコト。仏説ニ、此世ノ事ヲ無常ト見ルコト。
- (3) イササカナルコト。少シナルコト。

【『大言海』1935年刊】

- (1) 古言、いめ。睡レル中ノ物思ヒニ、現<sup>ウツツ</sup>ノ如ク物ヲ見ルコト。
- (2) 夢ノ如クハカナキコト。仏説ニ、此世ノ事ヲ無常ト見ルコト。

【『辞苑』1935年刊】

- ①睡眠中に現(うつつ)のやうに種種の事物を見ること。睡眠中に意識を半ば復活した現象で、熟睡前後の半睡の時に多く、大部分は視覚的の性質を帯びてゐる。(以下略)
- ②ぼんやりしたさま、はかないさま、頼みがたいさま等にいふ語。夢幻。
- ③まよひ。迷夢。

【『広辞苑』初版1955年】

- ①睡眠中に現(うつつ)のやうに種々の事物を見ること。睡眠中に意識を半ば復活した現象で、熟睡前後に多く、大部分は視覚的の性質を帯びる。身体内部から生じた内部感覚的の刺激乃至前日の興奮の残存を原因とすることが多い。いめ。
- ②ぼんやりしたさま、はかないさま、頼みがたいさまなどにいう語。夢幻。
- ③まよひ。迷夢。

【『新言海』1959年】

- ①睡眠中に物事を現<sup>うつつ</sup>のやうに見ること。いめ。
- ②夢のやうにはかないこと。夢<sup>むげん</sup>幻。

1948年に刊行された『人間失格』の例からすれば、(少なくとも)『広辞苑』初版や『新言海』に当該語義の記述があってもよいことになるが、挙げたように、それはみられない。辞書編集者に認識されていなかったか、あるいはあえて記述する必要がないと判断されたか。その場合でも、新しい語義であるから、あるいはまだひろく使われていない語義であるから、という判断がなされた可能性もあるが、すでに記述している語義のいずれかに含まれるという判断がなされた可能性もあろう。そうであった場合は、「新しい語義」のように見えるが、それはある時点からそう認識されたということであって、それまでは、「ユメ」のいずれかの語義と重なるものと思われていたことになる。

今ひとまず5の「ユメ」を〈将来の希望〉ととらえた。しかし、子供に「将来の夢はなんですか」とたずねれば、「サッカー選手」とか「花屋さん」といった答えがかえってくるのではないだろうか。「将来のユメ」という表現が成り立つのであれば、5には〈将来〉という語義が含まれていないことになる。〈将来〉は〈実現していない〉と言い換えることもできそうだが、〈実現していない〉を〈実現するかどうかははっきりしていない〉〈実現するかどうか不確かな〉とさらに言い換えると、5は〈実現するかどうかははっきりしていない、不確かなこと〉という語義であることになる。この語義の重点はどこにあるのだろうか。〈実現するかどうかははっきりしていない〉ということは、結局全体が〈はっきりしていない、不確かな〉ということになるのではないか。そうだとすると、『日本国語大辞典』第2版の語義3に限りなくちかい。

語義に関して、プラス、マイナスということが取りざたされることがある。そのとらえかたには必ずしも賛成できないが、今仮にそのみかたをとりいれて考えてみる。語義3〈ぼんやりとして不確かなさま、はかないさま、頼みとならないさま〉の〈頼みとならないさま〉を取り出せば、この語義3はマイナスの語義ということになる。しかし、そこに重点を置くのではなく、〈ぼんやりとして不確かなさま、はかないさま〉に重点を置けば、先の語義5にちかい。〈ぼんやりとして〉いることはマイナスで〈はっきりとして〉いることがプラス、〈はかない〉ことはマイナスで、〈しっかりしている〉ことがプラスだとみれば、語義3はマイナスで、語義5はプラスということになる。しかし、どちらも〈不確かなさま〉を表現していることでは共通している。そう考えた場合、「私にはユメがある」といった時の「ユメ」(語義5)はもともと日本語「ユメ」がもっていた語義に内包されていたことになる。さらにひろく文献にあたる必要があると考えるが、現時点では、これを一つの仮説として提示したい。

## おわりに

本稿では次のことを指摘、もしくは仮説として提示したと考える。「ユメ」の語義は「睡眠時のユメ」「覚醒時のユメ」「将来の希望としてのユメ」の3つに整理することができる。

日本語文化圏においては、「睡眠時のユメ」と「覚醒時のユメ」とが必ずしも截然と区別されない場合がある。それは「ユメ」と「ウツツ」とが「ユメウツツ」というかたちを媒介として対義ではなく類義として認識されるようになって、いつそう助長された。「将来の希望としてのユメ」の使用例は1900年を過ぎないと文献にあらわれないため、新しい語義とみなされることがあったが、「睡眠時のユメ」の比喩的用法に含めることができるのではないかということを仮説として提示した。

行論の途中では、「ユメ」の語義を次のような3つに整理した。

A：睡眠時のユメとその比喩的用法

B：覚醒時のユメとその比喩的用法

C：将来の希望としてのユメ

CをAに含めることができるのであれば、結局「ユメ」の語義はAB2つになる。AとBとを区別するのは「睡眠時」か「覚醒時」かということであるが、それが截然としない場合があることについては述べた。とすれば、日本語における「ユメ」の語義はは本来的な語義である「睡眠時のユメ」にすべて包含できることになる。

本稿では、「ユメ」をめぐる言語表現の分析から、「ユメ」の語誌を描くことを目的とした。「ユメ」がどのように語られるか、ということについての分析は十分ではなく、これについては今後の課題としたい。